

# 研究の目的とこれまでの経緯

子ども子育て支援新制度における**保育標準時間は8～11時間**。「11時間までは標準時間」とする制度のもと、園利用者（保護者）は11時間の保育を長時間保育とする認識をもはや持ち得ない可能性がある。しかし、現場における11時間保育への保育者の認識は、保護者のそれとは異なり**「標準」という言葉に対する違和感**をよく耳にする。

その違和感の正体は何なのか。我々の活動の取り組みの大きな目的はこのことを明らかにすることである。

そこで、まず現場保育者が保育時間についてどのように感じているのかに焦点を当て、保育者の意識をできる限り科学的な方法で数値化し考察した（70～72回の発表）。

# 研究の目的とこれまでの経緯

第70回大会では、保育者が**今の保育時間は子どもにとって長すぎると感じている**ことを報告した。

続く第71回大会では、長時間保育により子どもたちにどのような影響が出ていると感じているのかを検討。結果、保育者が集団保育の良さを認めつつも、**身体的・精神的発達や親子関係に対する長時間保育の影響を懸念**していることを明らかにした。

今回はこれまでの調査データをもとに、保育者自身が保育者や保育の質についてどう感じているのか、そしてその理由は何かについて分析・考察を行った。

# 調査方法

- 調査紙（アンケート）を使用
- 個人を特定できる項目はナシ。対象は保育士
- 男性職員の回答を抑圧しないため、性別は問わず
  
- 「親心を育む会」会員園など、埼玉県内の保育施設で配布・回収（都市部から農村部まで15自治体。26私立園と18公立園。公立園は1つの自治体内）
- 分析に用いた回答の数：703人
- 回答者の概要については前大会の抄録を参照

# 仮説

今回、左のような仮説をたて、これを示すデータがあるかどうかの分析を行った。

**保護者の労働の長時間化**



**保護者の子育て意欲の希薄化**

**保育の長時間化**



**保育者の労働時間および負担感の増大**

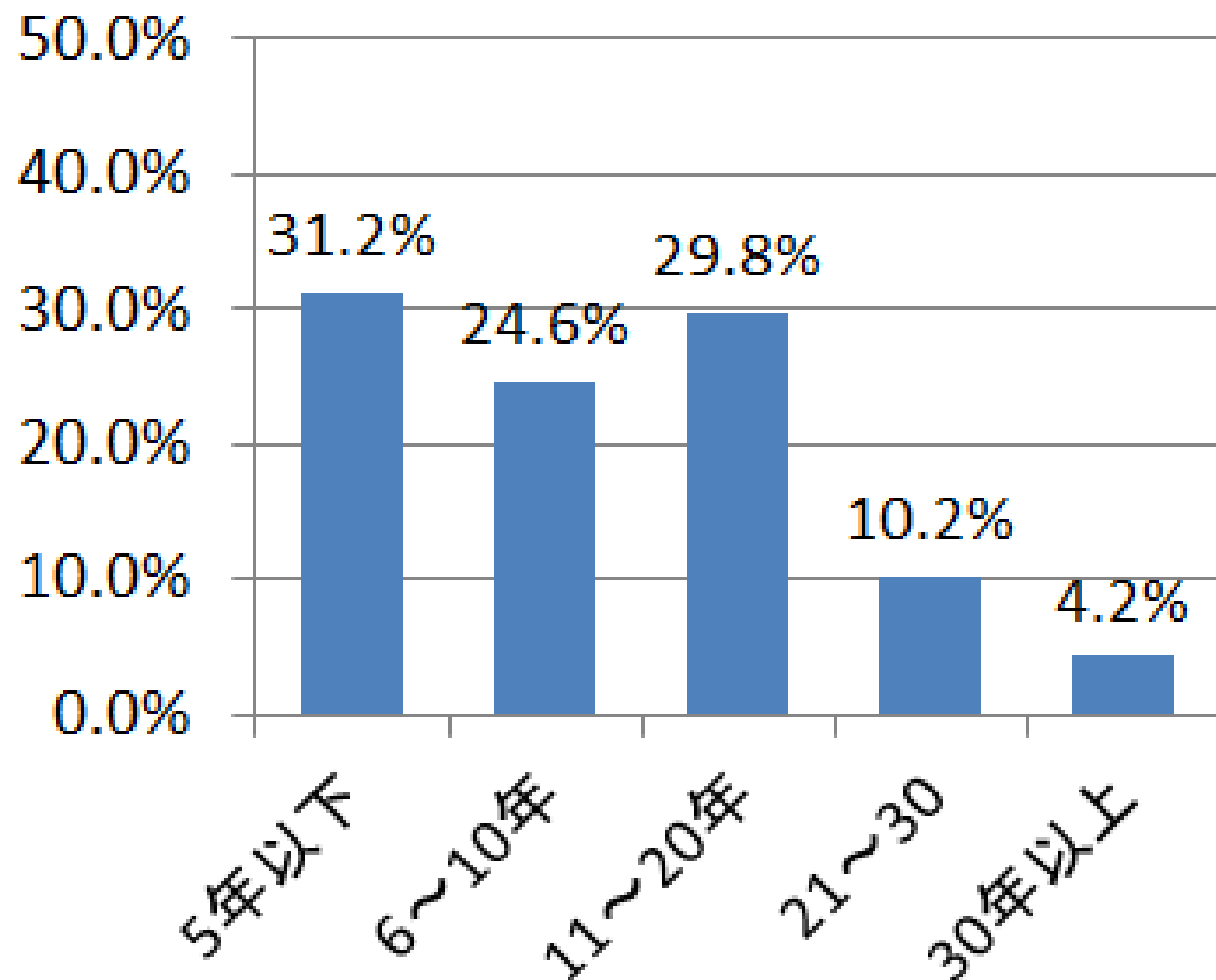


**保育者の疲弊**



**保育の質の低下**

# 調査対象者の勤続年数



- 回答者平均年齢37.2歳  
(20～74歳)
- 正規職員63.3%
- 公立園職員37.3%
- 平均勤務年数11.4年

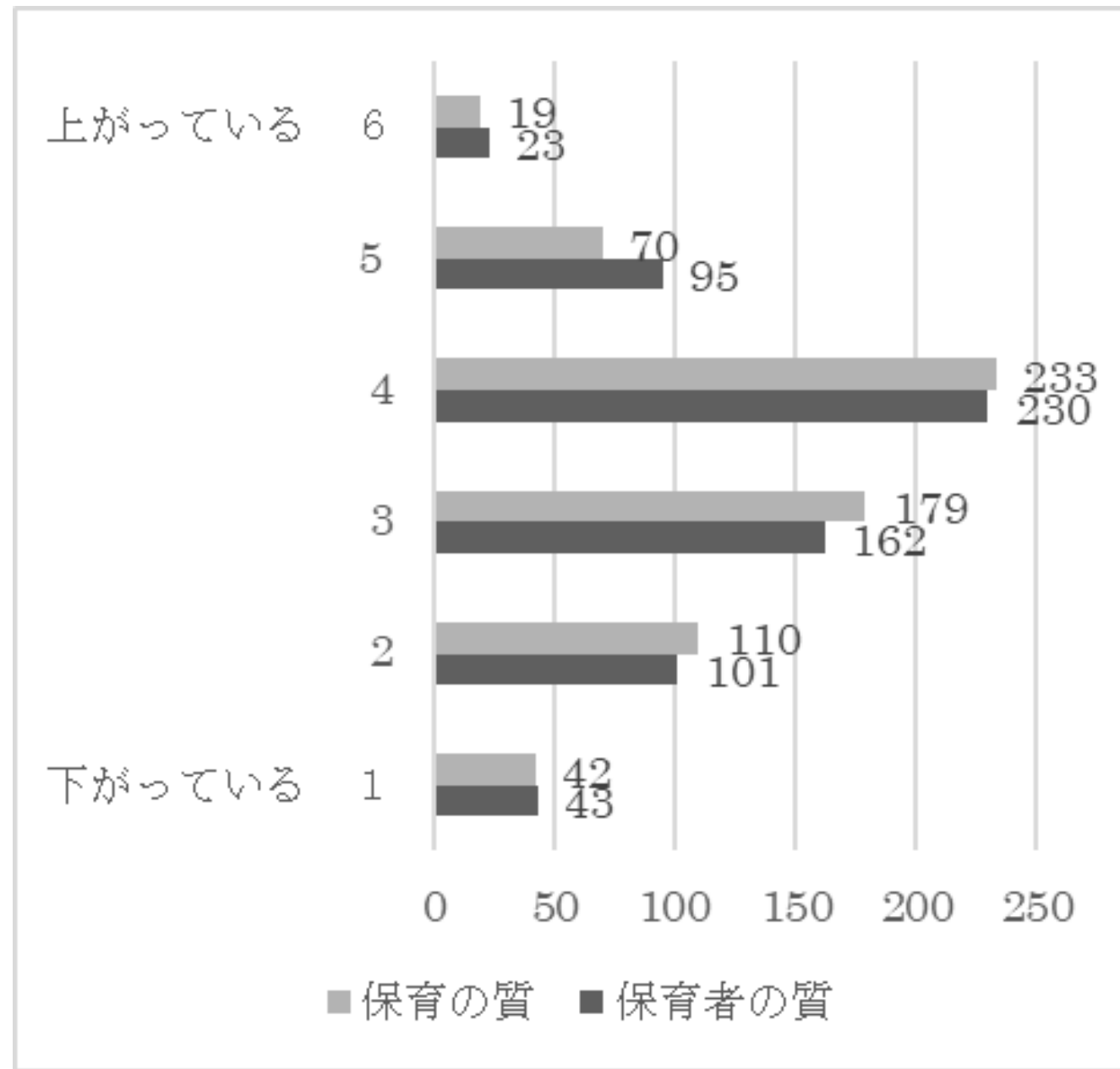


# 調査結果

「上がっていると思う」  
平均値3.5

「下がっていると思う」  
平均値3.3

保育や保育者の質について  
向上または低下？  
どちらとも言い難いと感じ  
ている保育者が多かった。



※「下がっている」との回答が多いという私たちの予測に反した結果だった。現場の保育者たちが今の自分や自分の周りの保育の質を低いと言えない（言いたくない）心理が背景にあると思われ、興味深い結果となった。

# 保育や保育者の質に関する設問との 相関が見られた他の設問

## 【設問】

あなたが子どもだった頃に見ていた親に比べると今の保護者は  
全体として…

子育てに熱心であると思う A

子育てに熱心ではないと思う a

→a群

「保育者または保育の質が下がっている」と回答する傾向

この相関（比例）については、保護者が子育てに熱心ではなくなっているために、保育者としても「やりがい」が低くなってきているように感じる、という解釈もできる。



# 保育者から見た保護者の労働時間と保護者の 子育てに対する熱心さとの相関

a群のうち保育士としての勤務が5年以上

「自分の子どもの頃に比べて保護者の働く時間が長い」の回答  
と相関あるも、勤務5年未満の回答者を含むと

「自分の子どもの頃に比べて保護者の働く時間が長い」の回答  
との相関は無し

5年以上働いている群では、「保護者が子育てに熱心ではなくなった」と「自分の子どもの頃に比べて、保護者の働く時間が長い」が相関（比例）しているのは、保護者の働く時間が短かった記憶があるからと考えられる。

保育士経験の短い保育士（≡若い保育士）の場合、すでに保護者の働く時間が長いのが当然となっているために、労働時間と子育ての熱心さが比例しないとも考えられる。つまり、保護者、子育てに対する保育者の認知自体が変化してきているということを示唆。

# 保育の質を上げるための方策に関する設問 (質が下がっていると答えた252人、複数回答)

「あなたやあなたの周りの保育の質を上げていくために必要なことは何だと思いますか？」

- 1位 待遇を上げる (211人)
- 2位 就労時間の中で保育時間と作業時間を分ける (160人)  
(ノンコンタクトタイムの確保)
- 3位 保育技術に関する研修を受けられるようにする (125人)
- 4位 コミュニケーションに関する研修を受けられるようにする (122人)
- 5位 園の開園時間を短くする (67人)

残りの項目：保護者が保育の重要性を理解する、国家試験の受験を必須とする

# 考察

保育時間が長くなったことと保育または保育者の質の低下を関連づける結果を予想していたが、これを裏付ける相関関係は見つからなかった。

**保護者の労働の長時間化**



**保護者の子育て意欲の希薄化**

**保育の長時間化**



**保育者の労働時間および負担感の増大**



**保育者の疲弊**



**保育の質の低下**

# 考察

保育者自身の勤務時間はある程度管理されているため、

「長時間保育＝保育者の長時間労働」とする認識は低いのかもしれず、結果、長時間保育が保育者自身に与える影響は少ないと感じているのではないだろうか。

# 考察

保育の質を向上させるための方策として、「**勤務時間内での保育時間と作業時間を分ける**」を、保育者が2番目に多く選んでいる。

子どもが保育所等に預けられている時間が長くなったことで、保育者の勤務時間中のほとんどに子ども達が在園し、保育が断続的にはなりえない状況の中、休憩や作業等のために使える時間が捻出しづらいことが推察される。

# 考察

保育の質の向上のための方策のひとつとして、十分な保育の準備や計画立案のための時間、休憩や自己研鑽のための時間（ノンコンタクトタイム）の確保について、現場の保育者たちがその必要性を感じていることは近年指摘されているが、今回の調査結果でも明らかとなった。

# これまでの研究をまとめて

調査対象となった多数の保育者が、長時間保育は「子ども・親・親子関係」または「子どもの育ち」に何らかの影響があると感じている。

特に0～2歳児にとっては保育所等に預けられている時間が長すぎると感じている。

しかし、その一方で11時間（またはそれ以上）の開所時間を「長い」と感じない若手保育者（勤続年数おおむね5年未満）も増えてきている。

保育料無償化の影響もふまえ、今後保育所等に長時間子どもを預けることは当然という認識が強まることが予測される。

# おわりに

子どもを園に長時間預けることは当然という認識が広がる結果、子どもの養育の第一義的責任者が親であるという事実の認識の低下につながることはないだろうか。

保育者や保育施設**だけが乳幼児の育ちを保障する場所**としての機能を求められ、子育ては家族や家庭の役割でなくなっていくのではなかろうか。

次世代の主演となる子どもたちを健やかに育てるため、家庭や家族と保育所等の役割と責任のありかたを熟慮していく必要がある。**遅参とならぬ検討変革が求められる。**